

説教余滴、 『クリスマスの宴会』

クリスマスは、神の独り子が世人の救いのためにお生まれになった、神の愛を喜ぶ時です。

神への感謝をさまざまな形で表現します。普段はつましい生活でも、クリスマスには、精一杯ご馳走を並べて、共に喜びます。一人ぼっちで寂しい思いをする人がいないようにお招きすることもあります。

『クリスマスの贈り物・・・家庭のための詩とお話の本』バルナバ・バルトス＝ヘップナー編、伊藤紀久代訳、新教出版社、1982年という一冊からご紹介しましょう。

ペーター・ローゼッカー（1843～1918）さんは、オーストリアの貧しい農民一家のクリスマスの祝宴を描いています。

「明日はクリスマスだ！ ぼくの母は材料さえ手に入れば、なんでも出来るんだから。家では、もう豚が一头屠られていた。これでパン屑を浮かせた肉のスープや、ベーコンや、ソーセージや、すい臓料理や、わさび入りの肉団子が出来ると、その上、ドーナツや、砂糖入りのパン・ケーキや、干葡萄とサフランの入った揚げ菓子も出来る！ ランゲンヴァングの旦那方の家では、そんなものは毎度のこと、取るに足りないもののようにだけれど、ぼくたちは一年に一回、食べられるだけで、清潔な胃袋でご馳走に飛びつくんだ。」

豚を屠る、と聞くとずいぶん豪華、と感じます。年一回で、残りの肉は、干し肉やスモークして貯蔵するのでしょう。

ローゼッカーは、オーストリアのシュタイアーマルクの貧しい農家に生まれ、仕立て職の徒弟から郷土文学の作家となりました。大都会の物質文明に毒されない素朴な、古い信仰をもちつづけている農民気質を讃美し、陽気な諧謔的な物語から、教育的な小説も残しています。

自伝的な『森の学校教師の手記』、信仰問題を主題にすえた『神を求める人』、および社会問題を取り上げた『最後の人ヤーコブ』と『永遠の光』などがあります。